

政治理論における〈有効性〉 ——高島通敏と戦後日本

'Utility' in Political Theory: Takabatake Michitoshi and Postwar Japan

越 智 敏 夫*

要旨

第一次世界大戦から第二次世界大戦にいたる時期、いわゆる「大戦間期」において日本の政治学は特異な発展を遂げたといえる。それは大正デモクラシーから始まり、天皇制ファシズムと超国家主義の勃興へといたる時期である。この現実政治と政治学的認識の同時的展開はどのように呼応していたのか。戦後政治学はこうした経験に対する「悔恨共同体」として始まったと丸山眞男は述べ、政治理論の有意性と科学性に関する論文によって戦後日本の民主化に深く関わった。その丸山の論考に対する高島通敏の批判と継承の両面について検討する。その作業によって政治理論の現実政治に対する有効性の観念について考察し、戦後民主主義の理想的特性に関する議論を展開した。

キーワード：政治理論、高島通敏、丸山眞男、民主主義、戦後日本

1. はじめに

あらゆる社会的事象や事故、災害などに接するたびに現代社会を理解する困難さに直面する。その困難を生み出す状況の現在性は、そのまま問題解決の困難さを示している。なぜならば、ある問題状況が発生したとしても、その解決方法が容易に示されるならば、人々はそれを現代社会の問題として認識しないからである。

また、ある事象が問題となるのは社会の構成員全体に対してではない。当事者にとっては非常に深刻な問題であっても、他者からすればそれが問題として認識されないことさえ一般的である。ここに差別や格差が生じる原因がある。だからこそ、社会問題を論じる際には、論じる主体自身が時代に制約された自己を対象化し、相対化する必要がある。その手続きを経ることがなければ、立論が社会に受容される可能性が低下するからである。

さらに社会問題とされるもののなかでも政治的領域に関する問題を論じようとする際には、その自己の対象化が、他の領域に比べてより強度に要求される。それは何を問題だと認識するか、あるいは何を問題だと認識させるか、という契機にこそ政治が発生するからである。

したがって政治学者は、平均していえばおそらく他の学問領域に比してそれぞれの研究実践において自らの方法論について自覚的にならざるをえず、それぞれの方法論を理論と呼ぶかどうかの差異はあるものの、各自の理論の政治性（あるいは非政治性）に関して常に他者に説明できる

* Toshio Ochi 〔国際文化学科〕

ような状態に自らを置くことになる。こうして政治問題を論じる際の政治学者には自己の方法論自体の対象化が課せられるようになる。政治学者の論文が学術的著述なのか、それとも個人の政治的主張を展開する一枚のチラシに過ぎないのかという問題が常に想起されるのはこの点に関わっている。

こうした個人の方法論に関する自意識が理論構築という形で現れている。本稿ではこの問題を戦後日本の民主化という視角から論じたい。特にそのなかでも丸山眞男（1914-1996）と高島通敏（1933-2004）の理論構築に関する議論をとりあげ、後者による前者の政治理論の批判、検証、継承を主として検討する。

この両者を問題対象とするのは、それぞれの論考が政治理論の政治性について多面的、複合的に探究しているためである。さらに政治理論の科学性については、高島が特に丸山の著作である『政治の世界』を意識して論じているからである。

またこれらの議論は、単に抽象的な学術的意義のみを念頭において展開されたわけではなく、戦後日本の民主化という具体的状況における政治学と政治理論という知のあり方に関わる問題として展開されている点も重要である。日本の戦後政治学が戦争経験、敗戦経験を対象化するなかで、政治理論と現実世界との関係が問題とされ、さらには市民の政治参加に政治理論は寄与できるのかという点にまで議論は拡大していく。政治理論家が存在した時代の文脈を検討し、理論の形成過程を確認することによって第二次世界大戦の経験が彼らに与えた影響も考察する。

そのような作業は、現在の状況においても意義をもつ。なぜならば2001年以降の世界における「正戦論」や、2011年以降の日本における「ショック・ドクトリン」の広がり、共通の歴史的経験が理念的なものをどのように変化させるかを悲惨な形で物語っているからである。そうした悲惨さを回避するための知的活動の萌芽としての丸山、高島による理論的応答を検討したい。したがって本稿の目的は、政治理論のあるべき姿についての研究者間の対応の、ある限定された部分に着目し、その政治理論の有意性と歴史性について確認することである。次章以降では、この丸山による政治理論構築に対する高島通敏の論考を参照しながら、両者における理論の意味の違いを確認したい。

2. 丸山眞男『政治の世界』と高島政治学

高島通敏の研究領域は多岐にわたる。時系列的には鶴見俊輔を中心とする戦時期日本の転向に関する共同研究への参加によって研究活動は開始されたと言ってよい¹。そうした思想研究に続いて、アメリカ政治学の理論研究、京極純一の指導による計量政治学、またその手法に基づいた選挙分析へと研究対象は拡大し、その後、市民運動の理論構築、平和研究にまでいたる。それらの基底には西欧に限定されない東洋や他の地域も含めた政治思想研究の成果もつねに存在してい

¹ 高島通敏「一国社会主義者——急進的知識人の転向の原型」（初出1959年：共同研究『転向』上、平凡社）『高島通敏集』2巻、岩波書店、2009年、223-285ページ、同「生産力理論——偽装転向と『第三の途』の理論」（初出1960年：共同研究『転向』中、平凡社）『高島通敏集』2巻、岩波書店、2009年、287-364、223-285ページ。以下、『高島通敏集』からの引用に関しては『高島通敏』集〇巻、〇〇ページと表記する。なお他の著者の文献も含めて、本稿の引用文中の傍点は特に表記のないものはすべて原著者による。

た²。

しかし本稿においては高島の政治理論に対する接近方法について検討する関係から、他の領域については、本主題と関連する限りにおいて取り上げる。高島の学問がつねに目的としているのは社会変革のための方法の提供である。詳しくは後述するが、したがって学問の有効性そのものが重要視される。そしてその有効性を維持するために社会認識のリアリティが重要なものとなり、現実を将来の可能性の見地から見るという視点が常に用意される。

つまりこの〈有効性、リアリティ、可能性〉というセットは高島の論考について、つねに重層的に表れる。この個人的思想構造は三点セットによる「可能性の学問」の追究でもある。この個人的な追究の政治理論に関する部分は戦後日本における政治学史的発展の時系列においては「丸山政治学」への応答として把握することが可能であり、高島本人もそれはかなり自覚的である。具体的にはその応答は丸山の著作である『政治の世界』(1952年)に対するものとして展開される。

この『政治の世界』は、丸山の著作のなかで多くの点において異質なものである。しかし、その異質性を説明するためには丸山の主要著書の刊行のあり方自体が、他の一般的な学術書とは異なることを説明する必要がある。丸山の主要著書は6冊である³。丸山による学術的な著述の全体量からすれば、これは驚くべき少なさである。書籍に収録されていない著述が多い。そして『政治の世界』以外の5冊はすべて論文集である⁴。

またそれらは著者の生前、『政治の世界』以外はすべて重版が続けられている。ところが『政治の世界』は1956年2月に第二版が刊行されて以来、増刷されていない。つまりこの『政治の世界』は単一テーマで刊行された唯一の書籍でありながら、著者本人によって流通を止められたままだった。それが図書館等以外で読めるようになったのは『丸山眞男集』の刊行後であり、文庫化によって入手がより容易になったのは2014年のことである⁵。しかし本書は第一版の刊行後、大きな反響を呼ぶ。その同時代的な反響について考察する前に、本書の内容について瞥見しておきたい。

まず丸山は当時の同時代的情況を「政治化」の時代と規定する。その政治化の時代とは社会の横方向へのひろがり（支配領域の拡大）と縦方向への深まり（滲透性の増大）の同時進行だとされる。前者は国際政治の現状に対応しており、後者は戦時体制の確立に現れたとおりである。そうした状況下で丸山が必要と考えるのは「政治の力を野放しにせずこれを私達のコントロールの下に置く」ことである⁶。そのためには「政治的状況の基本的類型とその相互移行関係」の明確

² 高島通敏に関する近年の研究には以下のようなものがある。伊藤洋典『〈共同体〉をめぐる政治学』ナカニシヤ出版、2013年、特に第三章「高度成長期」の政治学における二つのパラダイム：疎外論と政策論の展開と交差」を参照のこと。また新田和宏『「高島政治学」における市民政治の再発見：新しい市民政治理論の構築に向けて』『近畿大学生物理工学部紀要』第27巻（55～65ページ）、2011年。

³ 刊行順に、『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、1952年、改訂版1983年）、『政治の世界』（御茶の水書房、1952年）、『現代政治の思想と行動』（未来社〈上・下〉1956～57年、増補版1964年、新装版2006年）、『日本の思想』（岩波新書、1961年）、『戦中と戦後の間 1936 - 1957』（みすず書房、1976年）、『忠誠と反逆——転形期日本の精神史的位相』（筑摩書房、1992年、ちくま学芸文庫版、1998年）。これら以外に以下の二種があるが、前者は題名にあるとおり『現代政治の思想と行動』の追補であるし、後者は聞き書きとすれば、これらは主要著書としては列挙しがたい。『後衛の位置から——追補「現代政治の思想と行動」』（未来社、1982年）、『「文明論之概略」を読む』（上・中・下、岩波新書、1986年）。

⁴ また丸山の生前の主要出版物は単一の出版社から複数刊行されることはなく、すべて異なる出版社から一点ずつ刊行している。この点については本稿のテーマとは関連がない。しかし戦後日本の民主化状況における知識社会学的テーマとして検討すべきものだと思う。

⁵ 丸山眞男『政治の世界 他十篇』岩波文庫、2014年。

⁶ 前掲書、75ページ。

化が必要となるので、その関係を権力の介入による紛争解決という政治の一般的な循環形式として説明しようとする⁷。

その政治的状況の循環形式において政治は紛争 conflict（社会的な価値の獲得・維持・増大をめぐる争い）の解決 solution として定義される。制裁力を背景として紛争を解決する能力のとして権力 power が発生することになる。そのうえで権力が自己目的化し、抗争の手段であると同時に目標となる⁸。そのうえで政治権力の生産と再生産の過程が政治集団内部の縦の権力関係と結びつき、集団外関係から集団内関係への転嫁が起きることによって、最終的には社会的価値の分配 distribution という循環が完成する。こうして政治権力の再生産過程がマルクスの資本の循環過程をもとにして示される。

以上のような抽象的な説明に続いて、この政治権力の生産及び再生産がより具体的に説明される。それは〈支配関係の樹立→権力の正統化→権力の組織化→権力及び社会的価値の配分→権力の安定と変革〉という循環である。こうした政治の一般理論の構築の最後に、丸山は「政治化」の時代について語る。それは前述したように社会がいつそう「政治化」する一方で、大衆の政治的無関心が増大するという「非政治化」が進む状態であり、同時代的な日本とアメリカが例示されている。マスメディアの発展は大衆の受動化を進め、チャップリンの「モダンタイムス」に描かれたごとく、機械文明が社会組織の機械化と人間の部品化を進める。こうして「砂のような大衆」によって、民主主義の地盤のうえに独裁制が成立する危険性が高まるのである⁹。

結論部分ではこうした事態を防ぐための「方向性」が示される。それらは、民衆の日常生活のなかで政治的社会的な問題が討議される場の形成、民間の自主的組織による民意のルートの多元化、労働組合の活性化、社会保障の充実などである。しかしそれらの保障も「ある天気晴朗なる日に突然天から降って来るわけではなく、やはりそれ自体私達の【日常的な】努力と闘争の堆積によってのみ獲得される」という結論に至る¹⁰。

このような本書の位置づけについては多くの議論が可能であるが、ひとまずはこの当時の政治学者に与えた影響について考えたい。たとえば三谷太一郎は東京大学に入学後、教養部の「政治学」を受講したとき、担当教員だった京極純一が「これ以外の参考書は読む必要がない」とまで言ったと記憶しているという。その三谷にはこの『政治の世界』が「戦後日本が生んだ最も独創的で最も普遍的な知の啓示」であるように思われたとのことである¹¹。

より具体的にこの書籍の内容が明確に示したのは、日本の政治学が戦前のドイツ国家学からアメリカ政治学（より明確には行動主義政治学）へと大きく方向転換する契機となったことである。この転換が戦後日本政治学の起点となった。本書以降、それまで政治学の世界で言及されていたシュミット、ケルゼンといった固有名詞はイーストン、ラスウェル、ドイッチュへと変化していく。また松本礼二によれば『政治の世界』は、岡義達、京極純一、神島二郎、前田康博らによる重要な後続業績も生み出すことになった¹²。しかしそうした反響にもかかわらず、丸山自身はこの「純

⁷ 前掲書、77 ページ。

⁸ 前掲書、85-86 ページ。

⁹ 前掲書、149 ページ。

¹⁰ 前掲書、153-154 ページ。

¹¹ 三谷太一郎「わが青春の丸山体験」（初出「みすず」編集部編『丸山眞男の世界』（みすず書房、1997年）三谷太一郎『学問は現実に関わるか』東京大学出版会、2013年、43ページ。

¹² 松本礼二「《解説》丸山眞男と戦後政治学」丸山眞男（松本礼二編注）『政治の世界 他十篇』岩波文庫、2014年、478,480 ページ。

粹政治学」を放棄し、構想は未完に終わる。

高島通敏は『政治の世界』について『丸山眞男集』の「月報」において集中的に論じている。そこではこの「科学的政治学理論の確立」という丸山の構想が未完に終わり、『政治の世界』が絶版のままだった理由について「私のそれからの仕事は、その理由を私なりに考えるなかで、紡がれてきたといってもよい」とまで書かれている¹³。

続いて高島は丸山の「政治の世界を経済の世界になぞらえてモデル化することの限界」について指摘し、権力の集中と遍在に関する丸山の議論の「より根本的な問題は、政治の世界を社会的価値をめぐる権力闘争の世界として割り切ることにあつた」とする。つまり、丸山が依拠しようとした行動主義的政治学について「それはニヒリズムの政治学でもあつた。行動主義政治学は、権力エリートに対抗する大衆運動や市民運動をも、もう一つの権力として分析する用具しかもたなかつた」と指摘する。そして丸山が『政治の世界』を絶版にしたのは、「政治の世界をこのような形で権力闘争の世界として描ききることの限界を自覚」したためではないかと推量するのである¹⁴。

丸山の『政治の世界』の構想を政治実践の観点からとらえ直すと、これは近代哲学上の認識論の発展がホッブズ、ロック、ルソーにいたる政治理論を同時進行的に発展させ、そのことが結果的に専制君主の政治権力を市民に譲渡させることになったというその西欧近代のプロセスを、日本の戦後空間という数年間において戦前の負の遺産を悔恨的に活用することによって民主化の実現として再現しようとするものだったといえよう。その意味において、丸山にとって政治理論の構築はそのような実践の一部だったのである。

三谷太郎は『政治の世界』を、さらに具体的な政治状況に置くことで、丸山の目的を明確にしようとする。三谷によればこの構想は『「ファシズム」を阻止する広範な国内政治連合および同じ目的のための国際政治連合を成立させるための戦略戦術とその根拠を提示することを試みた』ものであって、「反ファシズム国内政治連合の構想」と即応していたということになる¹⁵。六〇年安保によってその構想は頂点を迎えるが、その運動の衰退とともに丸山は自らの研究を日本政治思想に関するものに限定するようになった。

以上のような論点と関連づけて考えると『政治の世界』が専門家のみを対象としたものとはなっていない理由も理解できる。郵政省人事部企画の「教養の書」シリーズの第19冊目であり、サンフランシスコ講和条約締結直後など、時代状況は考慮する必要はあるものの、あくまでも一般向けに刊行されたものである。したがって松本礼二も述べるように、「高度に専門的な知見を分かりやすく語る」ことが本書の特徴ともなっている¹⁶。また「高度に専門的な理論的探究と市民の政治的实践、それを支える政治教育とが、使い分けでも切り離してもなく、有機的につながり合い補完し合っている」のもそのとおりではある¹⁷。しかし次の問題はそのつながりと補完の態様ではないだろうか。したがってここで問題となるのはこうしたつながりの主体となるものは何かということである。そこで以下の部分では、丸山、高島の政治理論における政治主体の問題を

¹³ 高島通敏「『政治の世界』をめぐって」(初出『丸山眞男集』第3巻月報、岩波書店、1995年)『高島通敏集』第5巻、274ページ。

¹⁴ 高島通敏、前掲書、274-275ページ。

¹⁵ 三谷太郎「丸山眞男の政治理論」(初出『丸山眞男手帖』第38号、2006年)三谷太郎、前掲書、85ページ。

¹⁶ 松本礼二、前掲書、481ページ。

¹⁷ 前掲書、484ページ。

論じたい。

3. 政治の主体と研究の主体：「全身政治学者」としての高島

高島は先にあげた「月報」とは別に、丸山の『政治の世界』に言及している文章を何点か書いている。そのなかのひとつで高島は政治の世界を論理的に照射する丸山の建築家的手腕を高く評価したうえで、「私がより強くひかれたのは、今にして思えば丸山におけるもっと不透明な部分だった」と回顧する。それらの不透明な部分のなかに、先述した『政治の世界』で丸山が試みた「純粹政治学」の放棄された理由をあげている。そして「丸山政治学のもう一つの側面」として、「今や政治指導者ではなく民衆において、〈近代的〉な政治精神が樹立されなければならないという問題意識であり、民衆の自立とは何かという問いをうちに秘めた政治分析の方法の問題」が浮上するという¹⁸。

もちろんすべてのものに〈限界〉があり、あらゆる学問は挑戦されのりこえられる歴史的運命にあるということを指摘したうえで、高島は「のりこえられるということは、論理的不完全さが修正されたというよりも、むしろ時代の転回が問題に新しい照明をあたえ、別な視角をひらくという意味であることが多い」と述べる¹⁹。そして高島を丸山政治学へと導いたのが自分自身の学生運動における挫折体験であったことを認めたとうえで、その丸山政治学への批判的視点を形成したものは六〇年安保以来、市民運動に参加しつづけてきた体験だったとする。その体験を経たことによって高島の関心の重点は以下のように移動したという。

精神の抽象的な自立よりもそれを支える社会技術や伝統の問題、個人のバラバラの自立よりも集団が内的にデモクラシーを現実化して集団として自立してゆくことの方を重要に思うようになってきた。丸山政治学は、この視点からすれば、いわば肉体を欠いた精神であり、インテリ好みの主知主義的な自立論のように思えてきた²⁰。

ここでおそらく高島が想起しているのは、たとえば丸山の「ラディカル（根底的）な精神的貴族主義がラディカルな民主主義と内面的に結びつくこと」といった表現に見られるような「精神の自立」だろう²¹。このような丸山の「精神の自立」について遠山敦は「精神主義とでもいえるような『理念』への『偏向』というその生き方や倫理的態度であり、またそれを生涯を通じて一貫して維持した精神の強靱さ」と表現している²²。

丸山の「純粹政治学」で期待されている以上のような主体像は、自身の情念を否定することにより「政治的ロマン主義」を否定する存在である。また「事実としての存在拘束性」を認めながらも政治的党派性も否定しないことによって民主化という政治的目的意識を維持し続ける存在である。精神の強靱さによって「理念としての学問的客観性」も維持されることになる。これが丸山政治理論における少数者によって維持される「ラディカルな精神的貴族主義」の視点である。

¹⁸ 高島通敏「『主体的市民』のための学問」(初出『第三文明』1972年10月号)『高島通敏集』第5巻、282ページ。

¹⁹ 前掲書、283ページ。

²⁰ 前掲書、283-284ページ。

²¹ 丸山眞男「『である』ことと『する』こと」丸山眞男『日本の思想』岩波新書、1961年、179ページ。

²² 遠山敦『丸山眞男——理念への信』講談社、2010年、12ページ。

以上のような視点を丸山の戦後民主主義構想において検討してみると、丸山自身は戦前から戦中期におけるいわゆる「重臣イデオロギー（重臣リベラリズム）」を批判しながら、その重臣イデオロギーにみられる貴族主義的な要素を継続していると言わざるをえない。自由で自発的な個人による会合での議論を通じて精神を鍛えられた人々がそれぞれ「少数者」として民主主義を維持し、多数者をさまざまな少数者に分節化して具体的に理解するという状況、つまり「ラディカルな精神的貴族主義がラディカルな民主主義と内面的に結びつくこと」は本当に可能なのかという問いである。

この点に関して高島は丸山が没した際の追悼文においても若干異なった表現ではあるものの、関連した指摘をしている。丸山に対しては戦後日本の民主化状況における「西欧近代主義者」であることへの批判、あるいは「国民主義者」であることへのポストモダンやポストコロニアルな視点からの批判などがあるとしたうえで、しかし、より批判されなければならないのは、「丸山の思想的道具立てのなかで、近代ということと市民ということの区分が、いま一つ明確でなかった」ことではないかと指摘している。「マキャヴェリやヒトラーの主体性と市民の主体性は明らかに異なる」からだという²³。

この問題に対して上記のような疑義をもつ高島は、丸山が想定している政治主体と異なるものを主体としている議論として京極純一と神島二郎を挙げている²⁴。京極純一にとって「秩序形成能力のある主体的市民」の自立の核は、「とらわれない知的な精神」でも「共同生活を営む常民」でもなく、それぞれの内面的信仰に根ざすことであり、その上に「賢さ」によって和解と協力と秩序を築いてゆくことを求めたのである。また神島は政治主体としての「語らざる民衆」を導出するために「第二のムラ」や「常民」の思想を展開した。

神島は丸山眞男の政治理論と柳田國男の民俗学を統合させながら独自の理論体系を作り上げたことで知られているが、この「常民」概念ももちろん柳田からの影響が強いものである。ここで神島は政治を「権力者と民衆の永遠の対立」としてみる観方から解放しようとしている。政治を知識人の言説からではなく民衆の「民俗」的行動様式から了解しようとする方法である。高島がこの神島の方法を評価するのは以下のような認識がもとになっていると思われる。

官僚的福祉国家観が主流を占めるわが国の政治体質の中では、リベラリズムの政治観は、「精神貴族」としてのインテリのベシミズムのあらわれでしかなく、また、日本のフォークロアの世界から政治を見上げることには、いつも過剰な「怨念」や「情念」がつきまどっていたり、また、逆に農本主義的なコミュニケーションへの「あこがれ」に直ちに回帰したりという傾向が強かった²⁵。

つまり、情念や怨念が政治社会に結びつく論理自体を問題にしていたのであり、情念や怨念は絶対に政治社会に直接的には結びつかないことを強調しているのである。そうした力学を解明するために神島の「常民」概念は有用だったのである。高島は「天皇制の思想風土」についてもこの視点から以下のように述べている。「知識人は、大衆の中から脱出的に上昇し、それゆえに、

²³ 高島通敏「丸山眞男氏を悼む」（初出：時事通信配信、1996年）『高島通敏集』第5巻、152ページ。

²⁴ 京極純一『現代民主政と政治学』岩波書店、1969年。神島二郎『近代日本の精神構造』岩波書店、1961年。

²⁵ 高島通敏『『転向』研究から——林達夫像』（初出：『林達夫著作集』月報、平凡社、1971年）『高島通敏集』第5巻、125-126ページ。

自身のうちに大衆性を無媒介に温存させる。他方、知識人に置き去りにされた大衆は、実感的な生活の世界に埋没する。天皇制は、この思想のさげ目にしのび込み根を張る」ことになるのである²⁶。こうした局面にいたって問題となるのは政治主体としての知識人の責任である。そこで以下の部分ではその問題について論じたい。ただしその問題も、本稿のテーマである戦後日本における政治理論の構築という視角からの問いに限定して論じたい。

まず丸山は「政治理論」と自分の政治行動との距離について次のように述べている。

私の学問的な関心方面の「自然の発露」ではなくして、むしろ心理的にはそれにさからって、——評判の悪い言葉をあえてつかうならば——一人の市民として止むなしと「観念」しての行動の一部であった（したがって、なにか私の政治学の理論を——そのようなものがあるかどうかは別として——いまこそ適用し「実践にうつす」好個の機会として「魚が水をえた如く」活躍したというようなイメージで当時の私の言動を批判されたり、おだてられたりしたときほど、オヤオヤという奇妙な感じがしたことはない）²⁷。

よく知られているように、丸山は自身の活動に関して「本店」と「夜店」という使い分けをしていた。「本店」とは自身が専門領域とする日本政治思想史研究のことであり、それに対して「夜店」とはジャーナリズムを舞台とした時事的な言論活動のことである²⁸。ただ、先の引用からもわかるように、この「夜店」についての丸山本人の違和感は、「本店」との内容的な距離のためではない。またさらにその副業的な位置を問題にしていたわけではない。

丸山が他の知識人と異なるのは、この知識人による共同体に対して使命感とさえいえるほどの責任と義務を自らに課していた点である。専門研究者の枠を越える普遍的知的共同体への希求である。その知的共同体の成立を阻むものとは何か、という点が丸山の古典研究のテーマとなっていた。『「文明論之概略」を読む』などはその典型である。それぞれの時代の「現実」が絶対的な意味を独占してしまうという日本社会の歴史性を問題にしたのである。したがってその批判こそが丸山にとっての啓蒙活動の中心となる²⁹。

しかし、高島の場合はそのような啓蒙が議論の中心になることはない。高島の論考には、先に引用した丸山の述懐のように「〇〇としての行動である」といった表記がほとんど見受けられない。「市民として」「研究者として」という人格の分離の観念が高島にはなく、むしろ常に統合された全人格をもとに発言し、著述活動をおこなっている印象を受ける。この意味において高島は

²⁶ 高島通敏「解説『戦後日本の思想』」（初出：久野収、鶴見俊輔、藤田省三『戦後日本の思想』講談社文庫、1976年）『高島通敏集』第2巻、151ページ。

²⁷ 丸山眞男『丸山眞男集』第9巻、161ページ。

²⁸ 丸山眞男『丸山眞男集』第12巻、110ページ。

²⁹ もちろんこれらの啓蒙活動と知識人コミュニティの関係も重要な問題である。特に丸山にとってはそうした知的共同体の形成が自らの研究の中心テーマとなっていたと同時に、その実践を自らに課していたために、いっそう重要なものとなる。たとえば有名なように丸山が指摘する近代日本に出現した3つの知的共同体（明治初期の自由民権運動、大戦間の共産主義運動、終戦直後の悔恨共同体）のなかでも最後の「悔恨共同体」については本稿にも関連するところは大きい。しかし丸山のいう悔恨共同体が「過去の失敗をくりかえさない」という思想（というよりは実感）に基づいているとはいえ、これを「次はうまくやる」という決意表明のようなものと理解すれば、戦後の保守本流の政治家や知識人に親近性をもつ可能性も高いという点は指摘しておきたい。

いわば「全身政治学者」なのである³⁰。

だからこそ高島においては研究者、市民運動家でありながら、教員としての自己限定、禁欲が強く、『政治学への道案内』などの教科書や入門的論文など、若年層の人々や学生が読むことが想定されている著作については自らの政治性を説くことがほとんど見られない。もちろん丸山も政治学的論考は政治的主張でないことに対して非常に意識的かつ自覚的だったが、それが、前述の「人格分離論」に基づくものであるのに対して、高島の場合は、そのような使い分けが否定され、(おそらく高島からすれば)都合の良い「人格分離論」ではなく、一個人の確固たる統合性に基づいて、自己の主張における政治的禁欲性が展開されるところに両者の象徴的な差異を指摘することができる。

高島にとってはこうした丸山と対照的な認識にいたる経緯は自身の市民運動への参加によって形成されたと認識しているので、その過程について論じたい。ちなみに高島は他の文章でも丸山のアカデミズムへの撤退について言及している。それによれば、丸山は「思想史家としての任務を、代表的な知識人の認識枠組みの分析に限定し、六〇年安保以降は日本の現代についての発言をやめて大学の研究室に戻り、時代を超えた日本の思想の原型を探るアカデミックな仕事に集中していった」のに対して、藤田省三は「在野の一知識人として、現代の思想的課題に正面から取り組み発言しつづけ、藤田が師事し敬愛した丸山眞男の射程から自然にはみ出し、独自の地歩を築いたと対比的に評している³¹。後にこの藤田の行動が高島に対して市民運動の現場で大きな影響を与え、高島自身が運動の政治理論化を進める契機のひとつになっていく。

1953年以降、思想の科学研究会に参加していた高島は、つづいて鶴見俊輔による転向研究会にも参加する。鶴見、高島はともに1960年6月に画家の小林トミの発案から始まった「声なき声の会」に参加する。そうした市民運動への高島の参加から1965年の『『ベトナムに平和を!』市民文化団体連合』、のちの『『ベトナムに平和を!』市民連合』(通称:べ平連)の結成、組織化にいたる経験が高島に市民運動の理論構築を可能にしたと考えられる。しかし情況はより複雑である。

日米安保条約反対運動のあと、市民運動が停滞していくなか、1960年10月には浅沼社会党委員長らの刺殺事件が起こる。翌1961年2月には、『中央公論』1960年12月号に掲載された深沢七郎の小説「風流夢譚」に抗議する右翼によって、中央公論社の嶋中鵬二社長の自宅が攻撃され、家政婦が殺害され、社長夫人が重傷を負うという事件があった。

そして1961年12月には天皇制特集号だった『思想の科学』1962年1月号が編集を担当していた思想の科学研究会に無断で中央公論社によって断裁される。その後の紆余曲折を経て『思想の科学』は思想の科学研究会によって自主刊行されるようになる。しかしこの事態の推移のなかで、思想の科学研究会の中央公論社に対する姿勢に反発した藤田省三は脱会届を公表するに至る。鶴見、久野収、さらには竹内好、永井道雄などもこの一連の問題に関係してくるが、ここで高島は当時の思想の科学研究会事務局長として、会長である久野収と行動をともにし、事態の収拾に尽くそうとした。そうした問題を処理しながら高島は自らの市民運動の理論を構築していく。

その経験のなかで高島は『思想の科学』が目標としていたのは本来「生活者との交流」であって、それは「専門家」と「生活者」の対比という二元論を否定するはずであったことを、「シン

³⁰ この表現は埴谷雄高がかつて井上光晴のことを形容した言葉、また井上を主人公にした原一男監督のドキュメンタリー映画の題名「全身小説家」に依っている。

³¹ 高島通敏「藤田省三氏を悼む」(初出:「あしがくぼ通信」2003年)『高島通敏集』第5巻、158ページ。

マイ事務局長」として再認識するに至る。しかし、日本の社会構造に強く居座る「実感主義⇔抽象的訂正」「生活者の哲学⇔アカデミックな理論」「ホンネ⇔タテマエ」という二元論において、会がそれぞれの前者の立場を選択し、後者を排斥的に拒絶することになるのであれば、思想の科学研究会は大衆社会化の波に埋没するという疑念を持つにいたるのである³²。こうして「二階家」的思想構造としての日本の伝統的哲学が運動論の視点から批判されるにいたる。

当時の思想の科学事務局長としての高島の行動は、「ときに極めてラディカルになるにせよ、『思想の流派としては妥協を重大に考えている』と生涯を回想する鶴見の流儀にもかかって」と都築勉は指摘している。また「高島や鶴見にとっては六〇年安保の『声なき声の会』の運動が直ちにべ平連の運動に発展したと言うより、間に天皇制特集号破棄事件という極めて困難な経験を挟むことによって、より広く深く市民運動の論理を構築するようになっていたと考えられる」のである³³。

こうした経験が高島の運動の政治理論形成に与えた影響は以上のようなものだが、さらに問題を複雑にしているのが高島が師と考えた鶴見のアカデミズムに対する姿勢である。鶴見と行動をともにしながらアカデミズムの世界に生きることになった政治理論家としての高島は、その鶴見の方法論について以下のように述べている。

ひと一倍情念の強い躁鬱気質の鶴見が、冷徹な自己抑制と無機的な資料捜査を必要とするウェーバー的な了解科学や近代主義的な実証科学の道を追うはずがないと考えるのが自然である。ましてや、戦後の官学アカデミーの中でそれらが急速に正統性を確立しつつあるとき、反アカデミズムを旗印とする運動に執念を燃やしてきた鶴見が、素材こそ野心的とはいえ、方法的にアカデミーの亜流の道をたどるわけがないのだ³⁴。

鶴見が政治理論についてどのように考えていたかについて高島は次のようなエピソードも挙げている。高島がサークル（転向研究会と思われる）で発表したとき、「鶴見があげる転向の類型学の諸要因、状況・気質・強制力の種類・イデオロギー等を組み合わせつつ、ひとはいかなる要因の組み合わせによりいかなる転向をするか」を説明しようという「転向についての〈雄大な〉理論モデル」を高島が発表したところ、鶴見は「そんなパチンコの玉の落ち方の理論みたいなものに意味はない」と一蹴し去った、というのである。転向学を打ち立てようとする鶴見にとって究極的に意味をもたせられていたのは、「明らかに〈例外〉的にはみだす個々の玉の名実なのであって、玉の落ち方の実証的な一般理論でもなければ、クギの配列の仕方についての構造的了解でもなかった」のである³⁵。

このような鶴見の方法論を間近で見ていた高島にとって、ここで批判されているような「アカデミーの亜流」や「パチンコ玉の落ち方の理論」のようなものに接近することがあるはずはなかった。

³² 高島通敏「運動としての思想の科学——シンマイ事務局長の日記から」（初出：『思想の科学』1962年9月号）『高島通敏集』第5巻、66ページ。

³³ 都築勉「道場の内と外の交流——鶴見・丸山・高島が作る知の三角形」『現代思想：総特集 鶴見俊輔』2015年10月臨時増刊号、第43巻15号、207ページ。

³⁴ 高島通敏「解説『鶴見俊輔著作集 第2巻』」（初出：『鶴見俊輔著作集 第2巻』筑摩書房、1975年）『高島通敏集』第2巻、164～165ページ。

³⁵ 前掲書、164ページ。

4. 実践：研究と運動

既述したように高島はある種の「全身政治学者」として、領域別の発言や、時機に応じて自らの発言の政治的意味などを使い分けるといった発想をそもそも持っていなかったように思われる。したがって政治学者としての専門研究、活動家としての市民運動、大学教員としての教育活動の三つの類型的行動は高島のなかでは（少なくとも本人の意識のなかでは）対立しあうことなく、自然に融合していたはずである。もちろんそれらは実際の行動によってのみ成立する以上、それら三種の同時実践なくして、高島も成立しえない。そして最終的にはその三類型の融合を可能にしていたのは、高島の思想のなかでも特に独創的だと思われる「日常性」の思想だったのではないか。これよりあとの結論部分において、その理論と思想の構造について考えてみたい。

まず研究者としての実践についてである。転向についての共同研究への参加から始まった高島の研究者としての活動は、その直後に東京大学法学部の助手として発表した「アメリカ近代政治学の基礎概念」へと展開していく³⁶。この助手論文での行動主義的アプローチとモデルにおいても問題意識は明確だった。象徴化された社会規範の体系によって政治現象の説明に代えようとすることへの反発や、それまでの「制度主義」への批判は非常に顕著である。そうした基本姿勢のもとで「経験的」「科学的」な政治学が追求されている。そうした研究主体としての思想的宣言となっているのが「職業としての政治学者：政治学入門以前」である。

高島にとって「政治人」とは現実への関心をもち、指導・支配への意欲を持ち続ける存在である。それに対して「政治学者」はどこかで政治に挫折し、客観性、科学性をもとに政治に最接近する人間として規定される³⁷。そして丸山眞男の「現代における人間と政治」に対して、特にそこで提起される「マージナル・マン」としての政治学者の位置について検討される。常に自分が属する組織の周辺に位置することによって、内部と外部のあいだの緊張関係を体現することが重要であるというこの丸山の「マージナル・マン」を高島はいったん「批判的知性の学」として評価する³⁸。

しかし1968年の大学闘争を経た後でもそれは社会的に通用するのかという問いへと高島はつづけていく。つまり権力批判のバトスの空洞化が起こるのであって、「サラリーマン化した研究者群の出現」する状況を想定するのである。そうした状態で「市民の政治学とは何か」が維持されるためには単なるマージナル・マンという概念の提示では不十分だということになる。

つまりそこで必要となるのは支配の二分法の否定であって、「指導者と大衆、政治学者と一般市民という二分法を永遠不変なものとして固定化する思考法を疑うこと」が主張される。そのうえで、マージナル・マンが根本的に否定される。「こういう〈解毒剤〉的位置に自らを置くことが、いかに〈挫折〉と〈禁欲〉によって支えられているにせよ、究極的には専門への逃避の口実として、むしろ保身の役割を果たしているのが現実の機能なのである」。したがって重要なのは「権力を解体する市民の組織をどのようにオルグし、つくり上げるかという相互オルグの思想であり、そこに必要な技術と情念の問題」だということになる。こうして〈高貴な断念〉と〈冷徹な現実認識〉

³⁶ 高島通敏「アメリカ近代政治学の基礎概念」（初出：『国家学会雑誌』76巻7・8号、1963年、77巻7・8号、1964年）『高島通敏集』第1巻。

³⁷ 高島通敏「職業としての政治学者：政治学入門以前」（初出：『思想の科学』1970年5月号）『高島通敏集』第5巻、290-294ページ。

³⁸ 前掲書、302ページ。

による戦後政治学ではなく、〈凡人のオプティミズム〉と〈方法的な模索〉による市民の政治学が提唱される³⁹。

研究の実践と同様に市民運動の実践については「運動の政治学」において総合的に議論がまとめられている。権力は自らの精神（意志）によって他者の身体を動かし、市民は自らの身体を動かす運動によって他者の意志（精神）を動かそうとする、という定式にもとづいた論考である⁴⁰。

しかし先に述べたように高島の運動理論は、抽象的に作り上げられたものではなく、思想の科学研究会、声なき声の会、ベ平連といった運動の中心にいて経験したことが、この運動の理論の統合にも大きな影響を与えているのがよくわかる。興味深い例としては、こうした市民運動が既存の左翼政党や新左翼運動と連携するべきかどうかという点について、常に高島は逡巡しながらも最終的にはそれらを「権力の論理」の一部として否定しているということがあげられるだろう。

たとえば声なき声の会が六〇年安保闘争の最中、既成政党と距離をとるとき、高島は「自分たちの自発的心情が、効果の予測の上のみ立つ政治の論理によって無惨にも引き裂かれた音」を自らの内に聞く⁴¹。また自分たちの市民運動において新左翼系の諸セクトと距離をとることについては、「市民運動をスローガンや路線における幅広主義としてではなく、ましてや革命への戦略や展望における統一としてではなく、大衆の根にあるところの心情に即した共同性の表現としてつくり上げてゆく」必要性を説いている⁴²。

またベ平連は新左翼と協同すべきという主張がベ平連内部で優位を占めたことに対しては「市民運動を大衆運動として考える際の不徹底さが原因している」と批判したうえで、「そこにあるのは、大衆運動の、党派に対する基本的優位性への自信の欠如なのだ。この自信の感覚がないとき、市民運動は単なる量としての大衆運動の地位におとしめられ、特定の政治目的のための力の補完として動員され利用されるものに変形させられてゆく」と警鐘を鳴らす⁴³。

これらの党派的政治に対する批判の根底にあるのは「市民運動が根を下ろすべき大衆の心情とは、権力不信の心情」であるという確信である。そしてこの「権力不信」とは、単に政府を頂点とする体制の権力への不信であるだけでなく、反体制エリートのなかにもある〈小天皇制〉や〈小名望家社会〉への不信でもある。そのうえで「体制権力とエリート構造の交錯のなかで今や二重に疎外された大衆は、深い不信の心情を孤独の中をかみしめながら、マイホームの〈私〉へ逃避する」しかなく、「日本の大衆において、〈私〉を〈公〉に転化してゆく道筋が、その意味での〈私〉の〈個〉への転成が、反体制運動の中でさえ絶望的に閉ざされている」として、その不信感をもとに進展する管理社会化を批判するのである⁴⁴。

以上のような記述から浮かび上がるのは、高島が考える「政治」の観念である。つまり高島にとって政治とは、政策レベルの議論でもなければ、政治的党派の選択の問題でもない。それはひとえに人々が社会に対峙するときの「スタイル」の問題なのである。そしてそのスタイルの優劣

³⁹ 前掲書、303-304 ページ。

⁴⁰ 高島通敏「運動の政治学」（初出：『年報政治学 1976 年』岩波書店、1977 年）『高島通敏集』第 1 巻。

⁴¹ 高島通敏「声なき声の会の政治体験」（初出：『日本読書新聞』1960 年 7 月 23 日）『高島通敏集』第 1 巻、6 ページ。

⁴² 高島通敏「『声なき声』運動の十年」（初出：『声なき声のたより』50 号、1970 年）『高島通敏集』第 1 巻、43-44 ページ。

⁴³ 前掲書、44 ページ。

⁴⁴ 前掲書、45 ページ。

の評価は、それ自体にあるわけではなく、「より良い生活」への寄与という有効性による判定しかなのである。これは高島の論考の各所で言及されるバーナード・クリック『政治の弁証』のなかの政治の定義とも即応しているともいえる。

こうした政治のスタイルへの言及は、1980年代日本の地方政治のルポである『地方の王国』において、各地の社会党の状態を調査する際に、議席数さえ維持できればどのような政治スタイルでも良いと開き直る地方議員への批判として表れている⁴⁵。また自民・さきがけとの連立政権に参加することによって瓦解していく社会党への激しい批判とも通底する⁴⁶。

繰り返すことになるが、高島にとって以上のような研究の実践と運動の実践は、相互に対立するものでもなければ、使い分けられるようなものでもない。ごく自然に一人の人間として実践しているものである。そしてそれを可能にしているのは、高島の理論構造における「日常性」という概念なのである。

5. おわりに：日常性と可能性の理論化

高島は「日常の思想とは何か」において、現代政治を「日常性と非日常性の往還」ととらえている。一見、マルクスとヴェーバーの基本概念の解説に読めなくもないこの論文において高島が展開している論理の射程は限りなく広い。また執筆時に全盛期を迎えていた全共闘と市民運動との距離を維持しようとする主張も含まれるのは事実である。日常性を否定しながら知識人を批判する新左翼ラディカリズムに対して市民の自律性を維持するための方針が示されてもいる⁴⁷。

しかしこの高島の論文の中心テーマは、これもまた既述したような「理論と実感」「知識人と大衆」といった戦後日本の民主化状況における「二階家」的思想構造を超越するための方途なのである。「日常」について考え抜くことによって、ほぼ日本精神の宿命のようにさえ理解されかねない悪循環を断ち切ろうとしたのである。

高島のその方法は、単純化すれば「日常のなかに政治を発見する」というものであり、非政治的領域を政治的に維持するというものである。つまり日常と非日常が相互に組み入れられることによって日常が解放、開放されていくのであって、そこに参画するのが主体としての市民だということになる⁴⁸。この日常と非日常の相互交通による社会変革の構想は、あらゆる領域の「二階家」構造をも対象とする。個人の内面における公私意識の分裂に対しても、また社会と家庭、家庭と個人といったものまでも含まれるだろう。

こうした日常性のなかの「政治の発見」こそが、政治的言説の有効性と可能性の証明になるのであって、その証明の方法こそが高島にとってはリアリズムなのである。そうした可能性の技術の発見の方法について高島は次のように述べている。

政治学者は、〈非合理〉的とされる大衆の行動の底に、直接的世界の中で主体的人間を回復しようとする力学のあることをみてとらなければならないし、同じように、経済的規定性に抗し

⁴⁵ 前掲書、同ページ。

⁴⁶ 高島通敏「自民党に埋没する社会党」(初出:『朝日新聞』1984年8月5日)『高島通敏集』第4巻、24ページ。

⁴⁷ 高島通敏「日常の思想とは何か」(初出:高島通敏編『日常の思想』筑摩書房、1970年)『高島通敏集』第2巻。

⁴⁸ 高島、前掲書、42-44ページ。

そこからぬけだそうという民衆の自発的な力を無視することはできない⁴⁹。

そしてそれらの「リアリティを〈可能性〉という幅において切り取り、政治における慣性的な法則性を、それを廃絶するという問題意識とともにとらえるという学問においては、その探究者個人の思想的活眼は、ある意味では、すべてなのである」と述べる⁵⁰。

「現在」に還元しきれない「現実」の多様性をわたしたちは読み取るべきであるし、そうした姿勢がなければ、権力は「現在」のみを根拠に、権力への追従をわたしたちに要求するだけである。完全な支配がない以上、政治学が完全に体系化されないのは当然である。もしそうした「政治の完成」があるとすれば、それは悪夢のような社会以外ではありえない。だからこそ政治学のこうした未完成性、永続性は政治学に対する社会的要請を示している。これは逆説ではなく、政治の部分的進展、微調整による永続的な社会変革の可能性を示すという、政治学の中心的機能によるものである。

それらに全身全霊で打ち込むことが政治学者の責務だとすれば、たとえば丸山眞男における〈理論的探求、市民的政治実践、政治教育〉の相互補完はその責務への対応方法としてしごくまっとうなものである。たしかに松本礼二が、ある断念として陳述するようにそれを現代の政治学者に要求することは、「過大な要求」なのかもしれない⁵¹。しかし高島通敏という事例は、丸山とは異なった形でその隘路が必ずしも不可能ではないことを私たちに示している。

【補記】

本稿は高島通敏没後10年を記念して開催された講演・討論会「市民政治を論ずる」（立教政治研究会・市民政治研究会共催、2014年7月5日、於：立教大学）での研究報告「政治理論における〈有効性〉：高島通敏と戦後日本」をもとにしている。講演・討論会の企画、運営に関わった方々、また当日、多くのコメントを提供していただいた方々に謝意を表したい。

なお本研究の一部は新潟国際情報大学共同研究助成事業、および日本学術振興会（JSPS）科学研究費助成事業、基盤研究（C）19530119、基盤研究（C）23530173による助成を受けているものである。

⁴⁹ 高島通敏『『主体的市民』のための学問』（初出：『第三文明』1972年10月号）『高島通敏集』第5巻、280ページ。

⁵⁰ 前掲書、281ページ。

⁵¹ 松本礼二、前掲書、486ページ。